

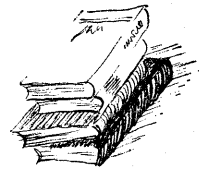
ことばと幼児

— 読書について —

副題に、「読書について」と書いておいたが、これは文字の読み書きのことではなくて、ドクショと読んで、本を読むことの意味である。幼児の場合には、これは絵本を読むことになる。

私は「ことばと幼児」の問題を、幼児・児童の読書という面から考えてみたいと思う。読書は、書きことばという言語（ラング）でつづられた文章を読むことであり、そのためには一定の言語発達が基礎になくはないけないので、そのことをここで問題にしようと思ったからである。

村石昭三



先日、六百名ほどの児童（六年生）の作文能力と、読書好きかテレビ好きかの関係をみたところ、読書好きの子は圧倒的に作文能力が高く、テレビ好きの子は全体的に作文能力が低いという結果が出てきて、読書の大事さをつくづくと感じさせられたが、いったい、いつごろから、また何故に読書の好き嫌いが出てくるのだろうか。

もっとも、このような言語能力と子ども好みの関係は幼児段階でみると、小学生にくらべてあまりきれいな結果が出てこない。幼児にテレビが好きかと聞けば好きと言うし、

絵本が好きかと聞けばそれも好きと言う子がいる。そのように幼児の興味は未分化というか、包括的というか、どちらかに偏ってしまふことが少ない。

それに幼児期は現象的（見かけ）には子ども自身の興味という内在的条件よりも、外在的条件、たとえば親の年齢（特に母親）の方がきいて、親が高年齢の方がその子のことばの理解力が高いという結果なども私たちの調査から出ている。

しかし、年齢がきくとみるのは全くの外在的なことで、もっと、子どもに対するしつけのスタイルがきいてみるとまた方がよいのかもしれないが、ともかく、読書の好き嫌いでいえることは、その偏りはずっと低い年齢からの、それもずっと長い発達経過の産物ではないかと思われるのである。

では、いつごろから読書の好き嫌いが出てくるのか。私の考えでは、小学校も六年生になって急に生じるのではなくて、一つの山は小学校の三、四年生ごろに現われる。子どもは学校の図書館から、何冊も本を借りてきては読む。毎日、借りて来ては読む。そして「ママ、小公子の本読んだことある？」と聞いて、「ママ、これ読みなよ、面白いら」と言ってくれたりするものであるが、読書嫌いはいこういうことが全くないのである。

小学校三・四年生の時期は、子どもの言語生活が大きく変わる点であるという点で知られている。たとえば文章を読む速さを調べると、三・四年生の時期を境に、急激にその速度が早まり、また、速さに個人差が強くあらわれてくるし、作文などでは、長さの進歩が一時的に停滞して、だから文章から脱け出る現象が現われておもしろい。

二

では、何故に三、四年生で読書熱が高まるのか。それは、この年齢で、一人読みが出てきて、筋が読みとれる上に、内容のおもしろさまで読みとれる「読み方」ができるためである。書きことばを手だてにして想像の世界を創造し、そこで遊ぶことができるのだから、おもしろくてこたえられぬにちがいない。

読書好きになれない子は、その原因の一つに、読書好きの子のような「読み方」ができないことがある。文字は読めても、書きことばを手だてにして、筋が読みとれない。いや、筋は読みとれても、内容のおもしろさまでは読みとれないのだから、おのずと読むのがおっくうになって、読書ぎらいになって、テレビに移っていく。まことに情ない話であるが……

。さて、こういう「読み方」の基礎ができあがるのは小学校低学年である。

それでは「読み方」の基礎とは何だろう。それは一般に漢字が読めないためだろうかと考えがちだし、それ故に、小学校低学年の国語の勉強というと、ひらがな・片かな・漢字の読み書きというように文字学習が主に見られがちであるが、

本当のところは書きことばという言語（ラング＝言語活動の基礎にあることば）が子どもに意識され、特にシンタックスを中心に学習され、その表現が書き方（作文）であり、その理解が読み方ということになるのである。すなわち、ラングの意識化という言語発達が基礎になり、また前提になって、それが「一人読み」という読書ができるようにさせてくれるのであって、文字の読み・書きというのは、その中の、そのための記号変換（音↓文字）にすぎないのである。

さらに、そのラングが意識される最初はいつかといえ、それは四歳期以後にあらわれる話しことばの意識化という、このときからはじまる。それまでは、たとえば友だちのしゃべることばに幼児音があると、「○○ちゃん、赤ちゃんみたい」と注意を向けはするが、自分のことばづかひまでは気づかない。それが四歳になってくると、だんだんと自分のこと

ばづかひにも注意を向けるようになる。それ故、ここからことばのしくみを気づかせる「ことば遊び」の学習が行なわれるようになるし、その指導はことばの発達を約束させることになる。

三

ところで、読書好きと読書嫌い、これを決定的にする、もう一つの原因は、お話のおもしろさを知っているか、いなかということである。話のおもしろさを知らされているか、知らされていないかということであって、このハシリは実は「幼児期」、もっと具体的にいえば、四歳期である。

四歳期を「イメージ年齢」と私は呼ぶ。話を聞きながら、ことばにすがってイメージを創り、イメージを広げられる年齢だから、ここでお話の楽しさを知るし、母親や教師からお話を口から耳へと語りつがれることによって、話のおもしろさを知らされるのである。

絵本なども母親や教師が口から耳へと語りつぐように読んでやらねばならぬのである。「今いそがしいから、一人で読んでいてね」などという、手間抜きばかりしては、子どもは話のおもしろさを語りつがれることはないだろうし、四

歳あたりで、お話をおもしろいと思わない子は、決定的に読書嫌いの小学生になるということを深刻に考える必要があるだろう。

「イメージ」というのは、なかなか語の定義がしにくいものの一つである。だいたい、外来語で日本語訳のできにくいものは内容に広がりがありすぎて的確に日本語で説明しにくいものであり、幼児教育の中でも、イメージを映像とみる限りでは「絵画的性」が強いけれども、自然の領域などでは、イメージを現象と現象の間をつなぐ論理・筋道にその根拠をおいて考えたりする。

さて、先に四歳期を「イメージ年齢」と呼んだのは、イメージが三歳期までのことばの発達を得ることによって、フィクションという想像の世界を創造することに注目するためである。この世にかなえられぬこともことばを聞いて想像できることは勿論のこと、自分が生まれぬ過去の世界、遠い、遠い未来のこともことばで想像することができるところに特徴がある。しかも、それは三歳期までの一定の言語発達（見聞き、経験したことが文に変換できること）ができたもののみが、話しことばでつづられた文章を耳で聞いて理解し、話のおもしろさまでに触れられるのでイメージがことばで広げら

れる。また、自分で話をつくったりもしてその世界に遊ぶことができるようになるのである。

過日、東北地区の幼児教育の大会が岩手県の花巻であった。「言語」の公開保育をみるのがあった。それは絵カードでお話づくりをすることば遊びである。お姫さまの絵カードが一枚。先生の誘いかけに一人の男の子が前に出てきての発表である。

お姫サマガ ベッドデ ネテ、(間)

朝、オキテ

オハヨウ ト、言イマシタ。

それは、たどたどしい、気取ずかしさがさらにたどたどしさを重ねるようだったが、先生はそこで、「だれに、あいさつしたの？」とたずねたが、もうこの子には、ここまで言うのが精いっぱいだった。

と、その話を聞いていた子どもたちの中から、

王子サマジャナイノ？

という声がとんで、このお話づくりは進んでいった。子どもをつくる、王子さまとお姫さまの出会いのイメージに私たちははっとしたのだが、こういう、お話づくりの楽しさを知ったこの子らは、きっと大きくなったら、読書好きの小学生に

なるにちがいないと思つた。

今一つ、ことはとイメージの関係でいえば、物語のつくるイメージには情動的な性格が強いけれども、ことばの発達はイメージの中から、論理的な芽を育ててくれるようになる。

それは絵画・映像を一つの「面」として示すならば、ことばは「線」としての存在であり、その線が長くつなげられる形が叙述という表現であり、接続詞を使ってそれをつなげていくことを可能にするのが論理であるからだ。イメージはことばによって、多次元の世界につくられるが、それを正確に叙述し、正確にことばで人に伝えようとするときに論理的な面が強調されるようになる。

私たちは、今、幼児の概念形成と言語の役割について実験調査を進めているが、三歳の幼児に「お母さんは？」と聞くとき、「ハタライテルノ」と言い、また「タイヘンナン」とも答えてくれた。子のために一生懸命に働く母を見てのイメージなのだが、この子らがさらに母の生活を見、母を語るることによって、その「たいへんさ」の論理(わけ)をやがて知るときがくるにちがいない。

四

幼児の、童話に寄せる心の大切さを知らされるのは浜田広介による幼児期の回想である。

小さい折、冬の夜は毎晩、いろりを囲んで母親から面白い話、かわいそうな話を聞かされたが、後年、童話を聞く楽しさを自分一人のよい経験として留めておかず、もっとたくさんの子らに語りつごうと思ひ立て、自分の聞いた話をもとに童話を編んだという。これが広介童話の起源である。

もっとも、この回想の中に、父親から文字の読み書きを教えてもらって、そのために人より早く小学生になって絵のよい童話・物語を読むようになったとある。この点だけみると、文字早教育論につながる話題になるが、本当のところは、幼児期に母親から聞かされたお話に寄せる心が下地になっていて、それが文字への興味を誘い、文字習得を早めさせたとみるべきであろう。

幼児期の子どもが絵本や童話を読み聞かせてもらって喜び、小学三・四年が一人読みして楽しめるように発達するのは、それぞれの段階で一定の言語発達が基になっていることは、四・五歳児の文字習得にも見ることが出来る。三・四歳までに一定の話しことばの発達ができて、ことばのしくみに気づくことが前提になる。そして店の看板や絵本に見かける

書かれたことば（書きことば）に対し、それが口で言われたことばが文字で書かれているという意味を知り、語られた一音が一字に対応し、しかも、その文字は他のどんな文字とも異なる形であることに気づくとき、子どもの文字に対する興味の出現となってくるのである。

その意味では、文字への興味は、狭義の文字指導の結果というよりも、もっと広く、言語指導とか、保育全般の発達指導の結果であることに注目する必要があるだろう。就学までにはほとんど文字を知らなければ、就学後の文字の勉強についていけないのではないかと危ぶむよりは、むしろ幼児期の、文字も知らぬほどの、言語指導が問われなければならぬし、幼児期の発達そのことが危ぶまれないならぬだろう。

幼児の発達は最初にふれたように、小学生にくらべて比較的外的条件がきいているような場合が多く、そのために、文字習得の場合でも、文字環境を整理してやれば文字を自然に覚えていくだろうと考えがちである。しかし、子ども自身の発達（内在する言語発達）に注目しなければ環境は形骸化してしまし、子ども自身の発達を約束するのが保育というものであろう。

言語環境の大事さは、例の狼少女のエピソードで語りつくされているが、この話は狼の環境に入れられた少女は狼らしくなったという適応現象に注目するよりも、むしろ潜在的に人間としてことばを使えるべく生まれてきた少女が、それを開花させてくれない環境に放置されたさだめ（運命）の不如意の方こそ問題にすべきことではあるまいか。

五

ことばの活動という現象の底には、その基礎になる、ことばの発達が先行するはずであり、それを正しく見きわめた指導をすることによって、私たちはことばで子どもの生長を約束してあげられるだろう。

読書についても、幼児期にお話のおもしろさを知った子、知らされた子が学校に上がって文字を知り、「読み方」を知って読書好きになる。おもしろさを知った子は少々勉強はきつからうと、漢字を覚えなくては本が読めなくなると恐れ、自分に言い聞かせるのだろう。そう思うにつけて私たちがこの幼児期から児童期への発達の輪廻（リンネ）ということに、ときにおそろしさを感じ、ときにその理（ことわり）の深さにうたれるのである。

（国立国語研究所）